



私の視点

政府の科学技術政策の骨格になる第2期科学技術基本計画が、05年度で最終年度を迎える。第3期計画の策定作業が今後、本格化する。過去10年近い計画を振り返ると、すぐに成果が出そうな応用研究に予算が重点配分されたり、産学連携の促進が強調されたりしてきた。その一方、相対的に基礎研究が軽視され、将来の技術革新の原動力になる科学への取り組みが、弱くなっていると感じる。

そもそも科学技術とは、科学(サイエンス)と技術(テクノロジー)だ。あえて「科学と技術」「科学・技術」などと書かないので、「科学を使った技術」「科学的な技術」と思われがちだ。科学は「私たちが置かれている自然を知りたい」という好奇心から出発

してしまふ危険さもある。パソコンや携帯電話などに囲まれているので、科学と技術の違いがあまり意識されないのも無理はない。生活をもっと楽にする技術は欲しいし、日本には資源がないので、高付加価値の製品を世界に売る必要があると思うのももつとだ。

区別は容易ではない。情報通信、ナノテクノロジー・材料、環境、ライフサイエンスが重点分野として、予算が優先配分されているが、先見性を持って取り組まれているのか懸念している。例えば環境だが、地球環境の正確な測定は大切な

地球を知り、エネルギー源の太陽まで「科学」しなければ、地球環境問題は解決には向かわないだろう。環境保全対策に多額の費用を出すだけで、地球を知ろうとする基礎科学をおろそかにすれば、将来後悔することになるだろう。技術偏重が続けば、大学

分が重なる。環境をナノテクノロジーが使われている測定機器で観測し、そのデータは最新の情報通信技術で世界に送られるといった、相互の調整や協力を可能にする運用も必要だろう。予算は、科学と技術の全体を見通した上で調整されるべきだ。重点分野を選ぶ戦略は有効と言えるが、それぞれの分野には、基礎科学という土台が存在していることを忘れないでほしい。

◆科学技術政策 基礎研究重視した予算に

するし、技術は「私たちの生活をより便利にしたい」という欲求から始まる。

だが、技術革新には、科学の発達が不可欠だ。科学と技術は車の両輪であり、中長期的には両者のバランスをとることが大事だ。

現代の科学技術には、科学の視点が軽視されているように感じてならない。発見と発明、基礎研究と応用研究などと区別されて議論されることが多いが、その

「温暖化が年〇%で進んでいる」「オゾンホールが年〇%で拡大している」などと嘆いても仕方がない。「地球にやさしく」と叫んでも、地球には「ありがた迷惑」かも知れない。

本来の意味も揺らぐ。大学の使命はいつの時代でも、将来を担う学生に質の高い基礎教育を提供し、學術研究の大切さと面白さを伝えることだった。学生が測定自体に忙しく、理論を学ぼうとしない風潮が広まれば、憂うべき事態である。重点分野の情報通信、ナノ

「知の創造により世界に貢献する」という科学技術基本計画の目的自体が、達成されないだけではない。技術イノベーションすら実現できず、単なる工夫に終わ

る。だが、技術革新には、科学の発達が不可欠だ。科学と技術は車の両輪であり、中長期的には両者のバランスをとることが大事だ。

現代の科学技術には、科学の視点が軽視されているように感じてならない。発見と発明、基礎研究と応用研究などと区別されて議論されることが多いが、その

「温暖化が年〇%で進んでいる」「オゾンホールが年〇%で拡大している」などと嘆いても仕方がない。「地球にやさしく」と叫んでも、地球には「ありがた迷惑」かも知れない。

本来の意味も揺らぐ。大学の使命はいつの時代でも、将来を担う学生に質の高い基礎教育を提供し、學術研究の大切さと面白さを伝えることだった。学生が測定自体に忙しく、理論を学ぼうとしない風潮が広まれば、憂うべき事態である。重点分野の情報通信、ナノ